

# しまね読進協 第53号

発行日 令和8年2月1日

発行所 島根県図書館協会 読書推進運動協議会部会 (松江市内中原町 52 番地 島根県立図書館内)  
ホームページ <https://www.library.pref.shimane.lg.jp/toshokankyokai/dokushosuishin.html>

令和7年度

## 島根県図書館協会の主な事業

### ◎第2回島根県図書館大会

つなげよう島根の図書館

分かち合おう図書館の未来

11月15日(土) 島根県立男女共同参画

センターあすてらす

基調講演「社会の未来を紡ぎだすために」

～連携・協働の輪の中で輝く図書館へ～

森 いづみ氏 (県立長野図書館)

特別報告「学校図書館の

「当たり前」を変えていこう

～読むことに困難を持つ子どもたちも

読書を楽しめる環境へ～

井上 賞子氏 (松江市立島根小学校)

加盟団体からの報告

「図書館と博物館 連携の協働展示

～様々な出会いをいかして～

景山民子・梅木里奈氏 (雲南市立図書館)

「図書館から発信する男女共同参画

～今日と明日への課題～

恒松哲也・下垣夏希氏

(あすてらす情報ライブラリー)

◎公益財団法人・読書推進運動協議会より表彰

全国優良読書グループ

おはなし会トムテ (邑南町)

◎島根県図書館協会より表彰

読書推進運動功労者 (団体)

おはなしパンやさん (出雲市)

◎読書体験記の募集

応募数 18編

入賞 3編

◎「この本いいよ!」島根の高校生・高専生

おすすめの一冊」投稿の募集

応募団体 8学校

応募数 144点

◎機関誌等の発行・配布

「しまね読進協」第53号

## 第2回 島根県図書館大会開催

11月15日に、第2回島根県図書館大会を大田市の男女共同参画センターあすてらすで開催しました。公共図書館や大学、学校図書館の職員、書店員など、約80名の参加者が会場に集いました。テーマは前大会より引き継ぎ「つなげよう島根の図書館 分かち合おう図書館の未来」としました。あわせて、各加盟団体が取り組んでいる活動を情報発信するパネル展示も行い、参加者同士の交流を図りました。

午前中の基調講演では、県立長野図書館長森いづみ氏に「社会の未来を紡ぎだすために」連携・協働の輪の中で輝く図書館へ」と題してお話いただきました。県と県内全市町村による協働電子図書館「デジとしょ信州」、県内書店との協働による図書館横断検索サービス「信州ブックサーチ」と連携した「書店在庫情報プロジェクト」、また、交流、ものづくり、遊びといった体験のできるオープンスペース「信州・学び創造ラボ」(県立図書館内)での取り組みなど、連携をキーワードに館長就任後から取り組まれてきた先進的なサービスについて紹介いただきました。

午後からは、松江  
市立島根小学校の井



上賞子氏より「学校図書館の「当たり前」を変えていこう」読むことに困難を持つ子どもたちも読書を楽しめる環境へ」と題した報告がありました。読書バリアフリー法は成立したが、すべての学校に読みに困難を持つ子がいると考えられているにもかかわらず、学校図書館には紙の本しかないのが当たり前になっています。「読むことの苦しさ」があるからこそ、より「読書」は重要であると考え、ICTを活用した読書バリアフリーの取り組みを紹介されました。続いて、加盟団体から2つの報告がありました。島根県公共図書館協議会からは、雲南市立図書館の景山民子氏、梅木里奈氏から、数年に渡る奥出雲多根自然博物館との夏休み協働展示について、化石や鉱物などの展示を見た多くの子どもたちから疑問や質問が出されたため、学芸員への質問BOXを設置したことなど、工夫を凝らしながら取り組まれた様子を報告されました。公益財団法人しまね女性センターからは、あすてらす情報ライブラリーの恒松哲也氏、下垣夏希氏より、男女共同参画への理解を深めていただけるよう「パッケージ貸出」など3つの取り組みを行ってきたこと、今後は、島根県図書館協会に加盟するなど、つながりを大切にしたい運営を行っていきたいと報告されました。受講後のアンケートでは、「たくさんの気づきのある実り多い講演でした」「展示ブースはお互いの活動を知るという意味で有意義だった」など、多くの感想をいただきました。

# 読書体験記 入賞作品

## 〈一般の部〉

### A君とのバトル読書

松本弘子（出雲市）



『日本の歴史』  
（講談社の動く図鑑MOVE）  
講談社

「さあ久しぶりにやりましょうか」と人懐っこい笑顔で近付いてくる彼は小学五年生のA君。彼との付き合いはもう二年になる。彼は歴史好き。特に日本の歴史に興味がある。

右手に抱えているのは講談社の『日本の歴史』と言う書物。私の目の前にどきっと置くとクリクリした目でページをめくりはじめた。

これからはじまるのは私が今まで経験したことのない方法での読書である。私の今までの読書といえは図書館か書店に行きゆつくり本を探して、気に入った本を見つけたら静かに黙読する。そのようなスタイルが読書だと思っていた。それがA君との出会いで大きく変わったのは否めない。

例えばこの講談社の『日本の歴史』の関ヶ原の戦いのページをあけたとする。そこには関ヶ原での戦いの様子などが書かれている。その中に小さな囲みがあって「こんな事があったの?」と思えるような内容が書いてあったりこぼれ話のようなものが書いてあったりする。

二人でそれを見ながら当時はこんなものを食べて

いたんだね。こんな長い物干し竿のようなものに旗をつけて戦場を歩くとなると大変だったろうね。当時はこんなに馬が貴重品だったんだね。この石垣はこういう積み方をしているなんてすごいよね。などと自分が持っている知識と自分が他の書物等から仕入れてきた話などを織り交せて二人で会話をするのだ。

これがまた楽しい。今まで自分が知らなかった事やら初めて聞く内容のものなどA君の勉強の度合いにもよるが毎日必ず「そうなんだ」と思えるような事が話の中に出てくる。

一人で静かに本を読むのが読書だと思いこんでいた私にとっては画期的なことである。

しかしこのクイズ形式でやる「バトル読書」は面白い。話題がどちらの方向に進んでいくか全く見えないからだ。

関ヶ原の戦いから話がスタートもどんどん枝葉が分かれて行き最後の方は関ヶ原とは全く関係のないような歴史上の人物にたどり着く事もある。その不確実なところがまた楽しい。読書とは動いているものだと改めて痛感する次第である。

本離れ、読書離れ、活字離れなどと言われて久しいが、こうやって一つの書物をお互いが論じ合うというのは、家庭でも地域でも学校でもできる事である。

少しだけ時間を取って、他の人とこのようなコミュニケーションをとることも読書の醍醐味の一つではないだろうか。

### 審査員コメント

読書を通じたA君との関わり、読書のあり方がとても素敵だなと感じました。読書の醍醐味を新たに気づかせてもらいました。



## 〈児童・生徒の部〉

### 言葉がくれた力

岩坂ひかり（横田高校）



『教室に並んだ背表紙』  
相沢沙呼 著  
集英社文庫

私がこの本に出会ったのは、中学生の時だ。自分と同じ年頃の主人公、以前読んだことのある作家というので読み始めたと思う。だが、苦しさや孤独といった暗い場面が多く、当時読んでいた友情や恋愛を明るく描いた作品と比べると、楽しめず少し退屈に感じて途中で投げ出してしまった。最後まで読めたのは高二になってからだ。本棚で葉が挟まったままのこの本を何となく読み始めると、途中で読むのを止めていたのがもったいないと思う位、夢中で読んでいた。読むタイミングが違っただけで、ここまで大きく感じ方が変わることは初めての経験だった。特に印象に残ったのは二つ目の話。主人公の真汐は教室で飛び交う視線やクラスメイトの明るさに耐えられず、誰もいない静かな図書室で毎日を通す。そして未来に希望が持てず、自分のことを「欠陥品」と感じていたが、司書の詩織先生と出会い、少しずつ前を向こうとしていく真汐に、私は共感した。私も中学生の時は話すのが苦手だから運動ができないからと、自分の嫌いなところを見つけては周りと比較、自分を責めていた。一つ一つは小さなことでも、「私は普通と違つ」と思ってしまうのはとても苦しい。今が辛いと未来にいる自分がうまく想像できなくなるのも当然だ。読み進めながら辛かったことを思い出していた。しかし、詩織先生の「未来が

考えていたものと違ったとしてもその時に抱いていた気持ちはずっと無駄になんてならない。後で懐かしんでその時の思い出に「葉を一枚挟んで読み返したくなるような大切な時間になる」「つらい思い出だとしても、その時の気持ちをバネにできる時が来る」という言葉に、中学生の頃は真汐と同じようにそんなわけないと思っていたのだが、今、高校生になって読み返すとわかるような気がした。中学生の時の苦しい思いがなかったら、新しい環境で頑張りたいとも、高校から地元を離れて寮生活をしようとも思わなかった。今まで家族に助けられてばかりの私が寮に入るといふことは本当に大きな決断だった。大変なことは多いが、優しい友達に出会って一緒に勉強したり遊びに行ったり、楽しいこともある。これまでの経験が今を頑張る力になっている。もう振り返りたくないと思っていた中学生時代も少しずつ笑って話せるようになった。そして、この物語を楽しめるようになった。詩織先生の言葉通り苦しい思いをしたのは無駄じゃなかった。苦しい思いをしたからこそできることもある。私は将来子どもに関わる仕事に就きたいと思っている。詩織先生のように学校に行くのが苦しく辛いと思う子どもたちに寄り添い、困った時に頼れる大人になりたい。

私は本が大好きだ。この作品の六人の少女たちと出会い、一緒に悲しんで考えて前を向くことができよう。私たちは物語を通してそこに生きる人の人生を体験できるのだ。出会うタイミングが違えば、見られる世界も違う。次の本との出会いが楽しみだ。

### 審査員コメント

これぞ「読書」という体験と確かな心の成長が語られており、岩坂さんの琴線に触れ生きる力を与えてくれた1冊であったことが、ありありと感じられた。

### 二度感じられる読書体験

池淵 美華（出雲商業高校）



『推し、燃ゆ』  
宇佐見りん 著  
河出書房新社

私が読書をするのが好きになったのはここ最近のことだと思う。小さい頃もよく本を読んでいたが、それは「好き」という道のりにはほど遠かったように感じる。

昔はよく「本を読むことは知識を蓄えることだ」と聞かされていた。そのため、よくいろいろな本を読み漁った記憶がある。しかし、小説を読んだ後の私の感想はいつも「よく分からない」というものだった。文章が難解だったり、書かれている情景が思い浮かばないわけではない。登場人物の心情や感覚がうまく頭の中で想像できないのだ。当時の私には、まだ人生経験も、それに伴う精神的な成長も足りていなかった。そのことを痛感したのは、宇佐見りん『推し、燃ゆ』という作品を高校生になって再読した時だ。中学生の頃に一度読んだ時は、やはり「よく分からない」という感想だった。高校の図書室で偶然見つけ、内容を思い出すため、もう一度読んでみることにした。だが、再読したときの感想は一度読んだ時とは全くの別物だった。昔は一つ一つの行動が細かく描かれていることも、主人公がどんな精神状態であったことも分からなかったのだが、思春期や葛藤を経験した今では、柔らかかった地盤が固まったようにすんなりと感情や表現が理解できる。私は、心情が鮮やかに想像できたことに驚いたと同時に感動した。たった数年で、自分はこんなにも多

くの人生経験を積み重ねてきたのだと実感したからだ。平凡な日常を過ごす中で、自分がどれほど成長していたか、どれほどの感情を経験してきたか、普段の生活では気づかなかった力に、読書を通して初めて気づかされたのだ。この経験をきっかけに、私の読書は心から楽しいものとなった。そして、読書をきちんと「好き」といえるようにもなれたのだ。芥川龍之介の『文藝鑑賞講座』に「何も無理には感心しなからず、そのまま少しは読まずにお置きなさい」という言葉がある。この言葉は、私の再読体験と深く重なり合う。

読書は知識を蓄えることだと言われるが、それはある程度の精神的な成熟があつて初めて成り立つものではないかと、私は思う。もちろん、本から新たな人生経験をj得て楽しむこともあるだろう。しかし、私の場合は、自分自身の人生経験を積んだからこそ、読書がより豊かで楽しいものになった。かつては理解できなかった本でも、少し時間を置いてから再び向き合うことで、その場の解釈を無理にこじつけず、自分の経験をフィルターとして、素直に物事を捉えることができるようになる。それは、作品に対しても、自分自身に対しても、誠実な向き合い方だと私は思う。

本を読むことは、自分の内側にある感情や経験と向き合い、追体験することなのだ。本を開くたびに、私は新しい世界を知る喜びと、過去の自分とは違う、人生経験を積んだ新しい自分に出会う感動を味わっている。これからも、たくさん本を通して自分の成長と向き合っていきたい。

### 審査員コメント

再読することで自分自身の変化を感じられた経験がすてきだと思いました。読書の価値に自分で気づくことができるのはとても大切なと思います。



令和7年度

# 読書推進運動功労者の表彰

公益社団法人読書推進運動協議会から、「おはなし会トムテ」が全国優良読書グループとして表彰されました。

◆おはなし会トムテ（邑南町）

代表者 高橋 文字

平成7年、当時の瑞穂町立図書館の司書に、「お話を一緒にやってみませんか」と、声をかけられたメンバーによって発足しました。

当時、メンバー全員が、幼稚園から小学生までの子どもを持つ子育て世代で、土曜日の学校帰りに、子どもたちがお話会に寄り、という流れがありました。読み聞かせだけでなく人形劇を実施したり、当時流行っていた巨大シャボン玉を作ったりして、子どもたちに絵本や児童書に親しんでもらいたいと願いをこめて活動してきました。

現在は、60代の6名で、毎月第3土曜日に、邑南町立図書館でお話会を実施しています。参加する子どもの数はだいぶ減りましたが、「子どもが本に触れる機会が必要なので、この活動を続けていきたい」という意思を全員が持つて活動を続けています。

島根県図書館協会読書推進運動協議会部会では、読書推進運動のために尽くし、功績が顕著な団体及び個人を毎年表彰しています。今年度は一団体を表彰しました。

◆おはなしパンやさん（出雲市）

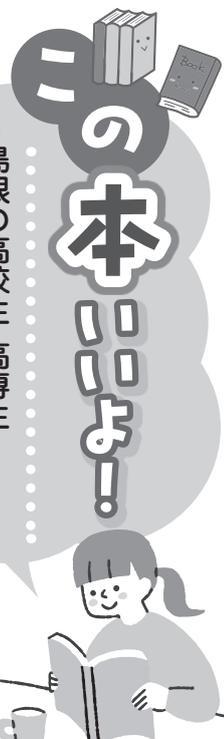
代表者 竹田 裕子

出雲市が平成19年度に実施した「ストーリーテリング語り手養成講座」の受講生によって発足した団体です。

団体名には、「パンの種がぐんぐん膨らんでいくように、お話を広げていきたい。焼き立てのパンのよう

に、温かく幸せな気持ちを、おはなしを語ることで届けたい。」との思いが込められています。

発足以降、出雲市立佐田図書館を中心に、「春・夏・冬のおはなし会」や、秋には「大人のためのおはなし会」の語り手として活動し、子どもから大人まで、幅広い世代におはなしを届ける活動を継続しています。



島根の高校生・高専生  
おすすめの一冊

今年も県内の高校生、高専生から144点のおすすめの本の投稿がありました。その一部を紹介します。



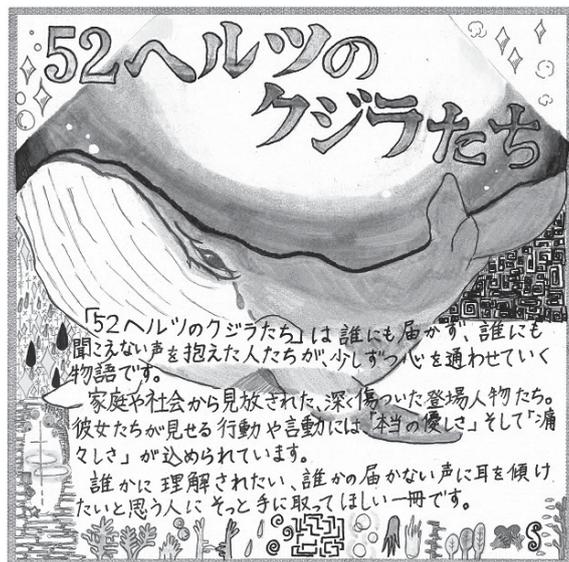
## 『新版 論理トレーニング』 野矢茂樹／著 産業図書

論理は自分を創る この一冊は、自分の癖や盲点を見つめ直す旅の出発点。自分を知り、自分を鍛え、自分を創る足場となる。  
論理は世界を創る 一人一人の考えが世界をより良いものに変えていく。ものの考え方を学ぶにはこの一冊から。（3年 Yuki.）



## 『52ヘルツのクジラたち』 町田そのこ／著 中央公論新社

「52ヘルツのクジラたち」は誰にも届かず、誰にも聞こえない声を抱えた人たちが、少しずつ心を通わせていく物語です。家庭や社会から見放された、深く傷ついた登場人物たち。彼女たちが見せる行動や言動には「本当の優しさ」そして「痛々しさ」が込められています。誰かに理解されたい、誰かの届かない声に耳を傾けたいと思う人にそっと手に取ってほしい一冊です。（1年 金田彩椰）



「52ヘルツのクジラたち」は誰にも届かず、誰にも聞こえない声を抱えた人たちが、少しずつ心を通わせていく物語です。  
家庭や社会から見放された、深く傷ついた登場人物たち。彼女たちが見せる行動や言動には「本当の優しさ」そして「痛々しさ」が込められています。  
誰かに理解されたい、誰かの届かない声に耳を傾けたいと思う人にそっと手に取ってほしい一冊です。